

『人生地理学』の思想史的意義

松 井 慎一郎

はじめに

「戦闘的自由主義者」として知られる河合栄治郎（1891-1944）は、少なくとも二度、牧口常三郎著『人生地理学』を読んでいる。最初は、東京府立第三中学校五年次、二度目は、第一高等学校三年次においてである⁽¹⁾。河合は、東京府立三中の学内情報誌である『学友会雑誌』（第11号、1907年12月）に掲載の論文「火山論」を執筆する上で、『人生地理学』から大きな学問的示唆を得たが、第一高等学校三年生の第一学期（1910年9月から12月にかけて）に、再び眼を通して。1910年の日記帳⁽²⁾の巻末の「第一学期 購入書及読書目」に『人生地理学』の書名が記入されている。その前後の書名には、『倫理学』、『帝国主義論』、『ゲーテの詩研究』、『偉人ペリクレス』、『進化論講話』、『欺かざるの記』、『海上権力史論 四』、『樗牛全集』、『近世外交史上巻』、『随想録』、『日本アルプス』、『南国記』などが記載されている。『帝国主義論』は、「日記」1910年9月13日条に読んだとの記述が見られるが、おそらく、1910年9月に発行された大西猪之介著『帝国主義論』（宝文館）のことを指していると考えられる。この書は、少壮の経済学者が史実や統計に基づいて、アメリカ、ロシア、ドイツ、イギリスの四か国の帝国主義を詳細に論じたものであるが、マハン著、水交社訳『海上権力史論：仏国革命時代 下巻』（東邦協会、1900年）、林毅陸『欧洲近世外交史 上巻』（慶応義塾出版局、1908年）、竹越与三郎『南国記』（二酉社、1910年）と同様、国際情勢および日本の対外政策への関心から繙いたものと考えられる。その前月に韓国併合が行われたという事実も影響しているかもしれない。つまり、この時点で、河合が『人生地理学』を繙いたのは、前回のように、火山に対する興味からではなく、帝国主義への関心によるものであったと考えられるのである。

32歳の若き牧口が苦学するなかで書き上げた『人生地理学』は、地理学＝自然地理学という考えが大勢を占めるなかであって、「地理学は地球の表面に一定の規律をなして分布する自然現象と人類生活現象（人生現象）との関係の系統的智識なり」⁽³⁾との考えに立ち、地形、気候、風

⁽¹⁾ 河合が『人生地理学』から与えられた影響については、拙稿「牧口常三郎と河合栄治郎」（『創価教育』第4号、2011年3月）を参照。

⁽²⁾ 河合浩子氏蔵、非公開。

土などの自然的環境と、経済、政治、軍事、宗教、学問、芸術、教育などの「人間の生活」との関係を経済的スケールで総合的に考察した大著であった。冒頭の「例言」で「吾人観察の対象は常に現在の活社会にあるが故に、正当に解せんとせば勢ひ時事の問題に接触せざる能はず」⁽⁴⁾と述べているように、それは、単なる学術書ではなく、1903年当時の社会情勢への対応という時事的な面も有していた。『史学界』（第5巻第11号、1903年11月）の書評で、「独り地理歴史担任の教育者及び受験者に向て必要なるのみならず、其他実業政治の方面に従事する人によりても世界の大勢を考察するに就きて最も必要なり」と評されたとおりである⁽⁵⁾。

本稿では、『人生地理学』発刊当時の知識人・思想家における国際情勢への反応を考察した上で、『人生地理学』の果たした思想史的意義を明らかにしていくことにしたい。

1. 道義と功利

「盛なる哉所謂帝国主義の流行や、勢ひ燎原の火の如く然り。世界萬邦皆な其膝下に潜伏し、之を賛美し崇拜し奉持せざるなし」⁽⁶⁾と、幸徳秋水が『廿世紀之怪物 帝国主義』（1901年）の冒頭で述べたように、20世紀初頭の国際情勢は、西欧諸国が独占資本主義経済段階に入り、商品や資本の輸出を保護するために、アフリカやアジアの弱小国家を侵略するという帝国主義最盛期であった。そうした帝国主義の脅威からいかにして日本を守るかというのが当時の日本の為政者や知識人に課せられた至上命題であったのである。

近代日本を代表する啓蒙思想家・福沢諭吉は、早くも明治維新直後より、西洋列強の脅威を強く訴える言論を展開した。国民を封建道德の呪縛から解放し、西洋列強に伍する近代国家への発展を切実に望んでいた福沢は、実際の脅威以上に、対外的危機を強く説いたのである。例えば、代表的著書『文明論之概略』（1875年）では、以下のように、過去にまで遡って、その脅威を強調する。

抑も外人の我国に来るは日尚浅し。且今日に至るまで我に著しき大害を加へて我面目を奪ふたることもあらざれば、人民の心に感ずるもの少なしと雖ども、苟も国を憂るの赤心あらん者は、聞見を博くして世界古今の事跡を察せざる可らず。今の亜米利加は元と誰の国なるや。其国の主人たる「インヂヤン」は、白人のために逐はれて、主客處を異にしたるに非ずや。故に今の亜米利加の文明は白人の文明なり、亜米利加の文明と云ふ可らず。此他東洋の国々及び大洋洲諸島の有様は如何ん、欧人の触るゝ處にてよく其本国の権義と利益とを全ふして真の独立を保つものありや。「ベルシャ」は如何ん、印度は如何ん、暹羅は如何ん、呂宋呷哇は如何ん。（中略）欧人の触るゝ所は恰も土地の生力を絶ち、草木も其成長を遂ること能はず。甚しきは其人種を殲すに至るものあり。是等の事跡を明にして、我日本も東洋の一国たるを知らば、仮令ひ今日に至るまで外国交際につき甚しき害を蒙ることなきも、後日の禍は恐れざる可らず⁽⁷⁾。

⁽³⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、第三文明社、1996年、427頁。

⁽⁴⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、1983年、5頁。

⁽⁵⁾ 塩原将行「牧口常三郎著『人生地理学』41の書評」『創価教育研究』第2号、2003年3月、271-272頁。

⁽⁶⁾ 『幸徳秋水全集』第3巻、明治文献、1968年、114頁。

西洋諸国の脅威に対抗する手段として、福沢は、島国という地理的特徴を生かし日本を貿易立国として発展させることを考えたが、交通・運輸の発達による物流の拡大についても、世界を商売相手としていかに儲けるかという功利的な観点から捉えたのである。

思ふまゝに米穀銅鉄及び諸物品を産出し得たりとし、山村僻邑も唯此等の物品の下に埋もる計りに為りたりとするも、此余れるを以て世界の他の不足に供給し、土塊に均しき窮谷の鉉類穀類も自由に世界の市場に出で、金と化し銀と化するの工風を得ざる間は、日本国内唯土塊の堆を見るまでにして、富の増加を見たりと云ふべからざるなり。(中略) 故に土塊を変じて金塊と為し、一寸の地も一瞬の労も皆金なりと為さんとするには、必ず先づ此等の地方を世界の市場に聯絡し、一寸の地も一瞬の労も皆世界大市場の春風に吹かれざるものなからしめざるべからず。即ち運搬交通の道を便にして、越後の麦は倫敦の麵包と為り、紐育の油は岩代の燈と為るに、頗る容易迅速なることを得せしめざるべからず。斯の如く運搬交通の道を自在ならしめ、商風一過、狭き日本国中に、世に埋もれたる地なく、埋もれたる労なく、埋もれたる物品なく、山野満目唯黄金の花ならしめんとするには、先づ第一に鉄道を布設するより外によき思案はなからん⁽⁸⁾。

しかし、長い期間にわたり儒教道徳の影響下にあった国民（とりわけ士族）にとって、近代化が急務の課題であることは理解できるものの、功利一辺倒の福沢思想⁽⁹⁾は素直には受け入れがたいものであった。やがて、資本主義経済の矛盾が露わになり、社会問題が顕現してくると、功利は否定されて道義を強調する言説が登場してくるようになる。

牧口が『人生地理学』を発行した1903年10月に、日露非戦論を貫くため万朝報社を退社した内村鑑三と幸徳秋水は、それぞれキリスト教と社会主義というように思想的基盤は異なるものの、ともに幼少期から儒教の影響を受け、道義を重視してきた思想家である。戦争を功利的な観点から捉えた福沢と違い、内村は道義的な観点から日露戦争を否定したのである。

国家経済に関することは私共の多く知らないことでありますから、私共はそれに就ては何にも申しません、然し其道徳上の悪影響は実に甚だしいものでありまして、私共の如く道徳を以て人類に取り最も大切なものであると見做す者に取りましては、縦し戦争が大々的勝利を以て終ると致しまするも、其得る所は決して失ひし所を償ふに足りないと思ひます⁽¹⁰⁾。

師・中江兆民の理想主義的な部分を受け継いだ幸徳は、封建道徳の打破という点で福沢思想の功績を認めるものの、それが、国民の間に利己主義を植え付け、弱肉強食の競争社会をもたらし、社会の秩序そのものを崩壊させたとして激しく批判した⁽¹¹⁾。そして、「今日の腐敗墮落は、腐敗

⁽⁷⁾『福澤論吉全集』第4巻、岩波書店、1959年、202-203頁。

⁽⁸⁾ 福沢論吉「富国策」1885年4月、『福澤論吉全集』第10巻、1960年、249-250頁。

⁽⁹⁾ 福沢思想の功利的側面に関しては、拙稿「近代日本における功利と道義—リベラリストの言説を中心に」（『沖繩法政研究』第17号、2015年3月）を参照。

⁽¹⁰⁾ 内村鑑三「戦時に於ける非戦主義者の態度」1904年4月、『内村鑑三全集』第12巻、岩波書店、1981年、150頁。

墮落者其者の罪たるよりも、寧ろ彼等をして其此に陥るの已むなきに至らしめたる社会現時の制度組織の罪に坐すること多からずんばあらず」⁽¹²⁾と考える幸徳は、「故に今日の腐敗墮落を防止せんと欲せば先づ今日の社会組織を根本的に改^{レコンストラクト}造せざる可らず」⁽¹³⁾と主張したのである。

功利から道義へと立ち返るべきことを主張した内村と幸徳であるが、道義を強調するあまり、その思想に自己犠牲的な側面があったことは否めない。日露戦争中、内村は、非戦主義者に召集令状が届いた場合、徴兵忌避の態度を採らずに、戦地に進んで赴き甘んじて敵弾の的となることを主張したが、それは、卑怯な行為と他人に迷惑を及ぼす行為を厭う道義心と、キリスト教の贖罪信仰に基づく独特の解釈に拠るものであった。

若し此時に当て兵役を拒まんか、疑察を以て満ち充ちたる此世は我儕を目するに卑怯者を以てし、我儕の非戦論なるものは生命愛惜のためであると信じ、我儕の説を聞くも之に耳を傾けざるに至るであらふ、且又我儕にして兵役を拒まんか、或る他の者が我儕に代て召集されて、結局我儕の拒絶は他人の犠牲に終ること、なれば、我儕は其人等のためにも自身進んで此苦役に服従すべきである、殊に又た総ての罪惡は善行を以てのみ消滅することの出来るものであれば、戦争も多くの非戦主義者の無残なる戦死を以てのみ終に廢止することの出来るものである、可戦論者の戦死は戦争廢止のためには何んの役にも立たない。然れども戦争を忌み嫌らい、之に対して何の趣味をも持たざる者が、其唱ふる仁慈の説は聴かれずして、世は修羅の街と化して、彼も亦敵愾心と称する罪念の犠牲となりて、敵弾の的となりて戦場に彼の平和の生涯を終るに及んで、茲に始めて人類の罪惡の一部分は贖はれ、終局の世界の平和は其れ丈け此世に近けられるのである⁽¹⁴⁾。

また、その強い道義心から「正義と人道は最後の勝利者なり」と考える幸徳は、帝国主義の隆盛のなかで日本が取るべき道として、「列国の猜忌を恐るゝ勿れ、列国の排擠を恐るゝ勿れ、之を避くるは、阿諛に非ず、諂佞に非ず、無為無能に非ずして、唯だ一毫の私心を挟まざるを表明するに在り」⁽¹⁵⁾、「嗚呼相喰む虎狼の如き外交場裡に、絶東の新興国が正義人道の一異彩を放ち来る、又快ならずや」⁽¹⁶⁾という道義外交を主張する。そして、その道義外交の具体的な展開として幸徳が思い描いていたのは、おそらくは、師・兆民がかつて説いた以下のようなものではなかったか。

第十九世紀如何に未開なるも万国公法如何に無力なるも我儕三千余万の大男児が相ひ抱持して一体を成し仁に仗り義を執り彼れ列国或は無礼を我に加ふるに於ては我儕三千余万の大男児が皆悉く一死以て自ら潔ふするに決心し全国焦土と為るも辞せず彈丸雨注するも避けず義と俱に生じ義と俱に斃れ瑣々た

⁽¹¹⁾ 幸徳秋水「修身要領を読む」1900年3月、『幸徳秋水全集』第2巻、1970年、308頁。

⁽¹²⁾ 幸徳秋水「社会腐敗の原因と其救治」1898年11月、『幸徳秋水全集』第2巻、150頁。

⁽¹³⁾ 同上、154頁。

⁽¹⁴⁾ 内村鑑三「非戦主義者の戦死」1904年10月、『内村鑑三全集』第12巻、447-448頁。

⁽¹⁵⁾ 幸徳秋水「清国問題と土耳其問題」1900年7月、『幸徳秋水全集』第1巻、1970年、328頁。

⁽¹⁶⁾ 同上、329頁。

る利益便宜の鄙情を一点も胸中に存せざるに於ては彼れ列国の兇暴なるも何ぞ畏るゝに足らん第十九世紀の今日に於て亜細亜の一孤島に於て全国民討死と一決して一步も退かざるの心を持して打失せざる時は一陣道德の大風颯然として西向し欧洲諸国の政界部面に堆積せる利己的汚穢の雲霧を一掃して余り有るを得ん⁽¹⁷⁾。

道義を貫くためには全国民討死もやむなしとの主張は、後年の「一億総玉砕」を想起させるものがある。自由民権運動の理論的指導者として知られる兆民の文章が、アジア・太平洋戦争期のスローガンと相通ずる点があったのは興味深い。

我が国における倫理学の先駆者・中島力造は、すでに教育勅語発布の直前に、「他人ノ為ニ自分ノ人トナリヲ亡ス」自己犠牲の精神が「人位ハ神聖ナルモノナリ」という倫理学の一大原理を穢すとして、「自分ヲ真正ニ愛セサル者ハ他人ヲ真正ニ愛スル事ヲ知ラス自愛ヲ除キテ他愛ノ何物タルヲ知ル道ナシ又自分ノ幸福ノ貴ムヘキヲ知テ始メテ吾等他人ノ幸福ヲ貴ムヘキヲ曉ルナリ」⁽¹⁸⁾と述べている。そうした中島らの人格主義を説く倫理学者・哲学者たちの影響もあり、道義と功利を調和しようとする言説も、20世紀初頭から現れはじめていた。松尾音次郎「道德に対する新感想」(1904年2月)は、「武士は食はねど高楊枝」という諺に象徴されるような、「道德を行ふと同時に利益を得ると云ふが如きは、全く在り得べからざるものなり」という旧来の道德観念を「一大誤謬」として否定し、「生きとし活ける人間」が日常の生活を営む上で「利益」は無視できぬとして、「人間が人間としての生存を全ふせんとするは誠に事理の当然にして、此当然を全ふするのが、道德の本体である」と主張したのである⁽¹⁹⁾。

2. 「七博士」の帝国主義と社会政策

『人生地理学』の発行当時、日本の世論は日露主戦論に向って大きく傾いていったが、その傾向に大きな影響を与えたのが、いわゆる七博士建白事件である。1903年6月、東京帝国大学教授戸水寛人・寺尾享・小野塚喜平次・金井延・富井政章・高橋作衛および学習院教授中村進午の「七博士」は、日露関係が緊迫するなかで、「噫我邦人は千歳の好機を失はゞ我邦の存立を危うすることを自覚せざるべからず」⁽²⁰⁾という対露強硬策を求める意見書を政府に提出した。この「七博士」は、当時の日本を代表する社会学者たちであり、代表的人物の戸水をはじめ、社会問題にも大きな関心を示し、我国最初の社会科学の総合的学会である社会政策学会に参加する者もいた。1896年4月に、桑田熊蔵・山崎覚次郎・高野岩三郎・小野塚喜平次らの少壮気鋭の社会学者によって設立された社会政策学会は、桑田・金井延・戸水寛人の執筆による「趣意書」に示されているように、自由放任主義と社会主義に反対し、資本主義経済制度を維持しながら、個人の活動と国家権力により社会の調和を図ることを目的とした研究団体であった。当初の研究テー

⁽¹⁷⁾ 中江兆民「外交論」1888年8月、『中江兆民全集』第11巻、岩波書店、1984年、223-224

⁽¹⁸⁾ 中島力造「利己主義ト利他主義」『哲学会雑誌』第44号、1890年10月、447頁。

⁽¹⁹⁾ 『六合雑誌』第278号、32-38頁。

⁽²⁰⁾ 「東大七博士の意見書」『東京朝日新聞』1903年6月24日、2面。

マは我が国最初の労働者保護法である工場法であった。1903年3月、農商務省商工局は、工場法を成立させるために、工場労働者の過酷な労働状態を克明に描き出した官庁報告書である『職工事情』を印刷して各関係者に配布したが、当時、対露強硬論を主張する戸水らにとっても社会問題の解決は大きな課題であった。

戸水は、もともとローマ法・民法の専門家であったが、帝国主義隆盛のなかで、国際情勢の変化にも敏感に反応し、ナショナリストとしての立場を鮮明にした発言を積極的に展開していく。1903年11月、アメリカは、コロンビアから独立させたパナマとの間で条約を調印、運河の開削権を獲得し、中断していた運河工事を再開させる。この動きに対して、戸水は、「今後ハ太平洋ガ欧米人及ビ亜細亜人ノ大競争場トナルノデス」と、帝国主義の主戦場が太平洋に移行することを予測し、「太平洋ヲ支配スルノ位置ニ在」る日本が「天然ノ位置ヲ利用シテ奮起努力シテ」競争に勝利することを期待する⁽²¹⁾。西欧列強との競争に勝利すべく日本の富強を期待する戸水は、国内の統一をはかるため社会問題の解決を急務の課題と考えたのである。

日本ニ於テハ人道ノ守リ方ガマダ足りマセヌ傭主ガ雇人ヲ虐待スル如キハ不都合千万デス特大キナ工場ニ於テ工女ヲ虐待スルガ如キハ甚ダ人道ニ反スルデス何ウモ私ノ考デハ思ヒ遣リト云フコトヲ大ニ發達サセナケレバナラス惻隱ノ心ヲ大ニ發達サセナケレバナラス（中略）兎ニ角此ノ人道ヲ充分ニ守ル様ニセナケレバナラス然ラサレバ充分ニ日本ノ社会ヲ改良シタトハ言ハレマセヌ⁽²²⁾

「七博士」中唯一の経済学者であった金井延が、「一体労働者を保護すると云ふことは必ずしも独り労働者のみを保護して労働者の方に偏するのではない、社会政策の趣意から言へば労働者を保護するのは単に労働者を保護するに止まらずして是によつて社会全体の調和を図るのである」⁽²³⁾と述べているように、「七博士」が社会政策に関心を抱いたのは、純粋な労働者保護という人道主義的な視点ではなく、帝国主義競争に勝つための国内統一という国家政策的な視点によるものであった。小野塚喜平次は、「労働者の奮起を歓迎し、其人格を尊重し、資本家と雖も被雇人を眼下に見下さずして、平等の心持を以て之れに接すると言ふ事が、社会政策の一大要件かと私は考へるのであります」⁽²⁴⁾と、人格尊重主義をもって労働者に接すべきことを主張したが、こうした視点は「七博士」のなかでは異端であった。やがて小野塚が「七博士」から離脱したことも去ることながら、その門下の中から、国家官僚として、労働組合を認める進歩的な労働政策を構想した南原繁や河合栄治郎⁽²⁵⁾等が輩出されたことは、特筆すべきことである。

小野塚と入れ替わりに「七博士」に加わった建部遯吾⁽²⁶⁾は、国際競争が「軍事的競争」、「経

⁽²¹⁾ 戸水寛人『新国民』有斐閣書房、1903年5月、9-10頁。

⁽²²⁾ 同上、21-22頁。

⁽²³⁾ 「報告者 法学博士金井延君」、社会政策学会編『工場法と労働問題』同文館、1908年、25頁。

⁽²⁴⁾ 「会員 法学博士 小野塚喜平次」、同上、118頁。

⁽²⁵⁾ 南原と河合の労働政策構想に関しては、拙稿「新渡戸・内村門下の社会派官僚について」（『日本史研究』第495号、2003年11月）を参照。

済的競争」、「文明的競争」の順に進化してきたことを指摘し、「文明的競争の大眼目は即ち道德の実質及形式の競争である」⁽²⁷⁾、「歴史上の教は国際競争上道德ほど強いものはないといふことを明に我々に告ぐるものであります」⁽²⁸⁾と、今後の帝国主義競争の柱として道德を重視する。しかし、「國家の獨立は火夫が鳶口で梯子を立てゝ居る様なものとすればいづれ一方では立たぬ、其数多い鳶口の中で一番大事なのは道德である」⁽²⁹⁾というように、道德を重視したのは、日本が帝国主義競争に勝つために必要な手段としてであった。それは、教育勅語發布以降、功利への反動が本格化し、道義の重要性が主張されるようになった思想的傾向とも符合するものであった。戸水にいたっては、帝国主義と道德を強引に結びつける、以下のような主張を展開したのである。

領土擴張をしなかつたならば、余つた人口を植付ける所なし、甚だしきに至つては二十世紀以後の大勢に適することが出来なくて、亡びるであらうと思ふ。若しも亡びるとすれば是即ち祖先の守つて居つた所の国を失ふのである。即ち祖先に対して不孝である。若しも亡びるとすれば日本に君臨せられて居る所の皇室が領土を失はれるのである。坐視してそれを待つのは是は皇室に対して不忠である。詰り私の考では、今日にあつては侵略主義、領土擴張主義、敵国撲滅策、是等は皆必要なのであつて、(中略)他国を侵略しないのが非常な不道德・不道德の骨頂だと思ふのであります⁽³⁰⁾。

これは、この時期、功利を主張する場合でさえも、道義という視点を抜きにしては言論としての影響力を発揮しにくかった状況を物語っている。

3. 浮田和民の倫理的帝国主義

このように、建部や戸水は、帝国主義と道德を調和させる主張を展開したが、この当時、彼らよりも明確かつ広範にそうした主張を展開したのが、浮田和民であった。浮田は、これからの日本が取るべき対外政策として、従来の西洋列強による「侵略的帝国主義」とは異なる「倫理的帝国主義」を主張する。「倫理的帝国主義」は、経済上において自国の生産品を輸出するための大きな市場を獲得するとともに、国内の過剰人口を収容するための植民地を持ち、政治上においては、西洋列強と協同して世界の問題に関する発言権を有し、世界の文化においても大きな貢献をするというものであり⁽³¹⁾、日本が具体的に展開する場合、「国際法上の合意に基き欧米諸国に向つて十分自国人民の權利を擴張し、又た亜細亞諸国の獨立を扶植し、其の獨立を扶植せんが為め

⁽²⁶⁾ 1903年10月発行の蔵原惟昶編刊『日露開戦論纂』では、富井政章と小野塚が抜け、代わりに、渡部千春と建部が加わっている。小野塚と建部の見解の相違に関しては、春名展生「進化論と国際秩序—日露戦争から第一次大戦後に至る思想史的素描」(井上寿一ほか編『日本の外交』第巻、岩波書店、2013年)を参照。

⁽²⁷⁾ 建部逕吾「国際競争と道德問題」1903年4月、『静観余録』金尾金淵堂、1907年、343頁。

⁽²⁸⁾ 同上、347頁。

⁽²⁹⁾ 同上。

⁽³⁰⁾ 戸水寛人「侵略主義と道德」『倫理界』第2号、1901年3月、6頁。

⁽³¹⁾ 浮田和民『倫理的帝国主義』隆文館、1909年、884-885頁。

亜細亞諸国の改革を誘導促進せしむる」⁽³²⁾というものであった。しかし、それは、形式面で倫理的な政策を目指すものの、人道的な道義から発したものではなく、後発の帝国主義国である日本が自国の膨張政策を進めるために必要な手段として考えられたものであった。

侵略的帝国主義は今日既に時勢に遅れて居る。斯ふ云ふ事をやる日には日本国民の膨張範囲が非常に狭くなつて仕舞ふのである。或は朝鮮位は取り得るかも知れない、若し又開戦論者の筆鋒で言へば満洲も取れるかも知れぬけれども、南洋へ手を揚げやうとすると侵略主義では門戸を塞がれるの外はない、年々五十万以上づゝも人口の増殖する日本をどうするか、亜細亞でも支那帝国の如きは人口が多いのである。朝鮮の如きはまだ人口が稀薄であると云ふけれども、到底朝鮮のみに日本の人口を入れる位では日本の将来はおつかぬ。予の帝国主義は南北両亜米利加へどしどし蔓延し、又南洋濠太利亞等へ続々日本人を蔓延せしめなければならぬと云ふ主義である。それをやるには平和的倫理的にやらなければいけない。固より国家の保証を要するのであるが、どこまでも国際法上の規則に基いて、而して国際法上で出来るだけ日本国民の権利を主張して、門戸を開かせる方針である。(中略) 若し日本人が野蛮人であれば拒絶する理由があるが、日本人が野蛮人でない、不道德の人類ではない以上は、国際法上亜米利加は拒絶することが出来ない⁽³³⁾。

吉野作造や大山郁夫に影響を与えた民本主義者としても知られる浮田ではあるが、その民本主義的な主張の背後には、ナショナリストとしての本性が存在していた。浮田は、「七博士」同様、労働者保護法の制定を主張したが、それは、労働者を「一兵卒」と捉える、国家の生産政策的な視点に基づくものであった。

労働者は平日一国の富を製する実力である。一旦緩急ある時には労働者が兵隊となつて出るのである。即ち今日所謂華族とか貴族とか金持と云ふやうな人でなくして、矢張り此職工場で働いて居る労働者、或は畠に鋤鋤を取つて居る百姓が剣を持つて国を守る所の武夫となるのである。だから一旦緩急ある時丈けに忠義を尽せ、国家の為に働けと云つて、平日は之を奴隷の如く、或は殆ど人間でないかの如く取扱ふと云ふやうな社会の状態では、将来国の為め健全なる状態を図ることは出来ぬ。労働者を保護することは今日軍隊を——兵卒を保護するのと同じことである。国の実力を養成する原動力を培養する所以であるから、是は政府も民間も力を合せて救はなければならぬものである⁽³⁴⁾。

浮田は、熊本洋学校や同志社英学校においてキリスト教の感化を受けた熊本バンドの一員であるとともに、忠君愛国主義を否定して人格主義による道德の再建を目指して発足した丁酉倫理会の創立メンバーであることから、人格主義者としても知られる。しかし、その人格の観念は、「倫理上人格はどうかと云ふと義務の主体である」⁽³⁵⁾、「人は天性国家的動物であると云ふことを認識せぬければならぬ」⁽³⁶⁾というように、個人人格の権威というより、国家のために多くの義務

⁽³²⁾ 浮田和民「日本の帝国主義」1901年4月、『帝国主義と教育』民友社、1901年、36頁。

⁽³³⁾ 浮田和民「帝國的社會主義」1904年1月、『倫理的帝国主義』、511-513頁。

⁽³⁴⁾ 浮田和民「労働問題の前途」1907年9月、『倫理的帝国主義』、541-542頁。

⁽³⁵⁾ 浮田和民「現今倫理界の二大急務」『丁酉倫理会講演』第2号、1900年6月、33頁。

を果たすことのできる従属的な個人を強調するものであった。浮田は、牧口も参照した著書『社会学講義』（1901年）において、国家以外の社会の存在を理論的に紹介するなど、我国における多元的国家論の先駆的紹介者でもあるが、生存競争の単位としての国家にこだわり、国家競争に勝利するためには個人の権威の侵害もやむなしとさえ説いていたのである。

蓋し国家は、人間世界に於て最大最高の社会なるが故に、飽くまで自存自衛を以て、其の最大最高の道徳と為さざる可からず。国家の上にある社会なければ、国家は他の社会の為に自から犠牲となるの義務なし。国家の上に国家あることなし。故に国家は衰頽亡滅するの外、決して自尽することある可からず。勢力尽くるまでは、生存競争するを以て、其の天職と為さざる可からず。而して国家を代表し、若くは国家を愛する者、亦た皆是の如くならざる可からず。然れども国家の内部に在りて、国家に従属す可き個人、若くは団体は、如何に高貴なる品位を有し、如何に尊重す可き歴史を有するにせよ、国家の大事の為に、速かに退讓降服するの義務あるなり⁽³⁷⁾。

浮田がこのような国家間の生存競争を重視したのは、当時の国際情勢も去ることながら、進化論の影響に拠るものと考えられる。熊本バンドの一員でもあった浮田ではあるが、その強い厭世観（1873年に父と母を一週間の間に亡くしたことが原因か）から、海老名弾正や小崎弘道らの同学とは異なり、自身でも「半宗教家」と称するように、キリスト信仰に深入りすることができなかった⁽³⁸⁾。浮田の思考の中心を占めていたのは、キリストの神ではなく、優勝劣敗・自然淘汰を説く進化論であった。

優勝劣敗は天理矣とは加藤〔弘之一引用者注〕先生が自叙して以て人権新説の題字となせし所にして是れダルウキン氏が種類本原論に於て「繁殖せよ変化せよ最強者生き最弱者死せよ」と云ふ格言を以て生物学の新福音となせし所なり余輩は両氏が是の天理を適用したるの成功如何に就ては異同の説なきに非ずと雖も植物界動物界及び人間界に於て又た疑ふべからざるの事実にして且つ生物の進化と社会の進歩とを刺激するの原因なること固より余輩の疑を入れざる所なり⁽³⁹⁾。

神の恩寵をその身で十分に感じる事ができていれば、内村のように、進化論の影響を受けながらも、神の摂理に基づき正義の支配が前進するというような独特の進歩史観を身につける事ができていた⁽⁴⁰⁾のかもしれないが、信仰体験のない浮田にとって、優勝劣敗・自然淘汰こそが「天理」「福音」であった。浮田もその影響を受けたと思われる社会ダーウィニズムの代表的論者である加藤弘之は、有機体を三段階に分類する、第一段階は「単細胞有機体」であり、第二段階

⁽³⁶⁾ 同上、46頁。

⁽³⁷⁾ 浮田和民「帝国主義的理想」1902年1月、『国民教育論』民友社、1903年、203-204頁。

⁽³⁸⁾ 浮田のキリスト教受容に関しては、姜克實『浮田和民の思想史的研究』（不二出版、2003年）「第二章 浮田和民の思想形成—熊本洋学校時代」を参照。

⁽³⁹⁾ 浮田和民「宗教上の優勝劣敗」『東京毎週新報』第8号、1883年10月、8頁。

⁽⁴⁰⁾ 内村の進歩史観については、松沢弘陽「内村鑑三の歴史意識 一〜三」（『北大法学論集』第17-19号、1966-67年）を参照。

は単細胞有機体が集合して組成している有機体、すなわち動植物のごとき「複細胞的有機体」で、人間もこれに含まれる。第三段階は、第二段階の人間が集まって組成している「国家」で、最も高等な有機体であり、「生物学上でも近来次第に信用されつつある説である」、「世界全人類は皆吾々の同胞には相違ないが世界はまだ最大有機体となつて居るのではない」と述べる⁽⁴¹⁾。浮田と加藤の社会進化論の相違を指摘する見方もある⁽⁴²⁾が、国家間における優勝劣敗の生存競争を「天理」と信じた点では共通していたといえる。それは、浮田や加藤に限ったことではなく、当時の多くの知識人に共通するものであった。

4. 丘浅次郎の生物進化論

我が国における進化論の受容は、1877年の東京大学でのE・モースの講義をもって嚆矢とするが、国民一般レベルにまで進化論を普及させることに与って力があつたのが、丘浅次郎著『進化論講話』であった。丘は、もともとホヤやヒルの研究を専門とする動物学者であるが、東京高等師範学校教授という立場に加え、文章の上手さも手伝い、小中学校教員のみならず、多くの国民に影響をあたえた思想家であった。日露戦争直前の1904年1月に発行された『進化論講話』は、7年後の1910年には第10版に達した、明治・大正を通じて最も多くの読者を得た生物学書といわれる。

浮田と同様、少年期に両親を亡くした丘は、厭世主義的人生観を持っており、それが多少なりともその学説・思想に反映されたようである⁽⁴³⁾。丘は、一時期、地球で覇を唱えた種族は例外なく絶滅するという考えのもと、人類も絶滅の方向に向かっていると説く。人類の滅亡を大前提として、それまでの限りある期間をいかにして生きるべきかという流れで持論が展開されるのである。

ダーウィンやスペンサーは、生物の個体の生き残りを基本に種の進化を考えたが、丘の場合、その基本を軽視し、集団の生き残りの問題として捉えた。そして、その集団の最高単位としたのが、人種あるいは国家であった。

人間の生存競争の有様を見るに、団体には大小種々の階級があるが、競争に於ける最高級の単位は人種といふ団体で、人種と人種との間には唯強いものが勝ち、弱いものが敗けるといふ外には何の規則もないから自分の属する人種が弱くなつては、他に如何に優れた点があつても種属維持の見込はない。それ故、実際教育するに当つては人種といふ観念を基として、人種の維持繁栄を目的とせねばならぬ。生物界では分布の広い生物種属は必ず若干の変種を生ずるもので、変種は尚一層進めば独立の種となるもの故、斯かる種属は初め一種でも後には必ず数種に分かれ、互に劇しく競争して其中の少数だけが、後世まで子孫を遺すことになるが、人間の如きは最も分布の広い種属で、既に多数の人種に分かれて居ること故、今後は益々人種間の競争が劇しくなり、適するものは生存し、適せぬものは亡び失せて、終には僅少の人種のみが生き残つて地球を占領するに違ひない。(中略)今日の所で、後世まで子孫を遺す

⁽⁴¹⁾ 加藤弘之『新文明の利弊』金港堂、1908年、120-122頁。

⁽⁴²⁾ 武田清子『日本リベラリズムの稜線』岩波書店、1987年、158-161頁。

⁽⁴³⁾ 丘の人物と思想に関しては、筑波常治『『丘浅次郎集』解説』（『丘浅次郎集』筑摩書房、1974年）を参照。

見込のあるものはヨーロッパを根拠地とする若干の人種とアジアの東部に住んで居る若干の人種と僅に二組に過ぎぬ。されば如何なる種類の教育でも、常に此等の事実を忘れず、他の生物の存亡の有様に鑑み、進化論の説く所に従うて、専ら自己の属する人種の維持繁栄を計らねばならぬ⁽⁴⁴⁾。

「アジアの東部に住んで居る若干の人種」が日本を指していることは容易に推測できるが、このことは、純然たる動物学者であっても、日本国家の生存という課題に敏感に対応せざるをえなかった事実を示している。大杉栄と同様、発刊当時『進化論講話』を読んで大きな影響を受けた北一輝が、処女作『国体論及び純正社会主義』（1906年）のなかで、「現今の地理的に限定されたる社会、即ち国家を以て永久に生存競争の単位となし、今日の進化の途上に於て生ぜる人種の差を以て永劫まで相対抗すべき単位の競争者なるかの如く断ずるに至つては万有を静的に考ふる者として愈々以て進化論の思想と背馳す」⁽⁴⁵⁾と、その進化論の矛盾を指摘しているのは的を射ていたといえる。

5. 世界—国家—郷土

『人生地理学』が発刊された当時、多くの知識人の頭を占めていたのが、国家間の激しい生存競争場裡に日本がいかにして生き残れるかという課題であったことは前述したとおりであるが、そうした大勢に反発する形で、一部の青年知識層の間で、個人における内面の権威を強調する傾向も現れていた。それを象徴するのが、1903年5月の第一高等学校一年生藤村操による日光華厳の滝への投身自殺であった。「悠悠たる哉天壤、遑々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとする」という文章から始まる「巖頭の感」を投身直前に滝上の樹幹に刻んだ藤村の自殺は、哲学的煩悶による自殺とされ、5年間で40件の後追い自殺があったように、多くの青年たちに大きな衝撃を与えた⁽⁴⁶⁾。藤村と同学の阿部次郎・安倍能成・魚住折蘆らは、『校友会雑誌』誌上で個人主義的思想を積極的に展開していくことになった。たとえば、阿部次郎「理想冥搜の態度」（『校友会雑誌』第138号、1904年6月）は、「我に理想信仰を与ふるものは我自身也、我以外の歴史も社会も教権も凡て材料を呈出して我が選擇するを待つる臣下に過ぎざる也、嗚呼廓寥たる此の宇宙の間我が事を決すべきものは我一人のみ、父母も兄弟も朋友も我に理想信仰を供給すること能はず」⁽⁴⁷⁾と、あらゆる外部的権威から解放される自己の内面的権威を高らかに訴えたのである。

国家主義と個人主義の両極の間で揺れ動く時代思潮のなかで、牧口の『人生地理学』が「第1章 地と人との関係の概観」において、個人と、世界、国家、郷土という空間の関係を明確にし

⁽⁴⁴⁾ 丘浅次郎『進化論講話』、『丘浅次郎集』266頁。

⁽⁴⁵⁾ 『北一輝著作集』第1巻、みすず書房、1959年、109-110頁。

⁽⁴⁶⁾ 藤村の投身自殺が与えた影響については、平岩昭三『検証 藤村操—華厳の滝投身自殺事件』（不二出版、2003年）を参照。

⁽⁴⁷⁾ 『阿部次郎全集』第12巻、角川書店、1962年、61頁。

ようとした意義は小さくはない。福沢らが主に自国の経済発展という観点から世界の物流を捉えていたのに対して、牧口は、世界の人々と繋がる自己という観点から表現する。

余が一兒。生れて母乳を欠く、乃ち牛酪を以て之に代ふ。ときに屢次邦製の粗品に懲り、医師に請うて漸く瑞西牛酪を選定し得たり。是に於てか最早ユラ山麓の牧童に感謝を払ふべきを知る。転じて其が一襲の綿衣を見る、忽ち黎黒なる印度人が炎天の下に流汗を拭きつゝ栽培せる綿花を想起せしむ。野人微賤の一子女、呱呱一声既に々々、命、世界に懸るにあらずや。(中略)斯の如くにして吾人は生命を世界に懸け、世界を我家となし、万国を吾人の活動区域となしつゝあることを知る。而してこは実に二十世紀の開明に際会したる吾人の為さゝらんとすとも殆んど得べからざる所にして、又た当に為すべき所のものなるを知る。然るを何等の痴漢ぞ、敢て自から其眼界を狭限し、徒らに古来の障壁に拘泥し、蝸牛角上の小闘に忙殺せられつゝあるや⁽⁴⁸⁾、

はるか遠い異国の人々の顔を想像する豊かな国際感覚が発揮されているが、国家の存在を否定する「汎愛虚妄の世界主義」に対しては、強く反対する。国家間の激しい帝国主義競争の現実をしっかりと認識する牧口は、国家の重要性を以下のように説くのである。

蒸気と電気との二大動力は、地球を距離に於て縮少し、時間に於て短減し、世界を打つて一丸となしたり。去れば往昔小規模に、各部落の間になされたる競争は、今や大仕掛けの国際的競争となれり。是に於てか万国比隣、国と国、人種と人種、虎視眈々、苟くも些の罅隙あらば、競ひて人の国を奪はんとし、之が為めには横暴残虐敢て憚る所にあらず、以て所謂帝国主義の理想に適へりとなす。而して此間に於ける法律と道徳との制裁如何と顧みれば、人の物を盗むものは盗として罪せらるゝも、人の国を奪ふものは却つて強として畏敬せらるゝ時世にあらずや。此間に立ち外は以て列国の爪牙に防衛し、内は以て、個人の自由を認め、生命財産を保護し、吾人をして高枕安眠の生活を遂げしむるものは、夫れ唯自国あるのみ⁽⁴⁹⁾。

ここには、「国家のための個人」ではなく「個人のための国家」という視点が示されているが、これは、「第二十八章 国家地論」の章末の参考文献にあげている、浮田和民解説『ウィロビー国家哲学』（東京専門学校出版部、1901年）やジオン・ダブリュ・バルジェス著・高田早苗訳『政治学』（東京専門学校出版部、出版年不明）の影響によるものと考えられる。『ウィロビー国家哲学』の「第六章 国家の目的」には、「国家は外部の侵犯を防禦し其の民族的生命を保持発達し其の内部の秩序を維持し以て人民の生命財産自由を保護し以て国家の永久的生存を為すに充分なる権力を有せざるへからず」⁽⁵⁰⁾という文章がある。1890年代のアメリカ社会の構造的変貌期に、国家の究極的な目的を人間の神格化に求める国家論がJ・W・パーージェスやW・W・ウィロビーらの政治学者によって唱えられた⁽⁵¹⁾が、教育者として人間の成長の可能性を信じていた牧口は、こうした国家論を自家葉籠中の物とすることができた。国家の職能について、①「内憂

⁽⁴⁸⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、13-14頁。

⁽⁴⁹⁾ 同上、14-15頁。

⁽⁵⁰⁾ 浮田和民解説『ウィロビー国家哲学』東京専門学校出版部、1901年、159頁。

⁽⁵¹⁾ 中谷義和『草創期のアメリカ政治学』ミネルヴァ書房、2002年、29頁。

に対する保護的活動」、②「外患に対する保護的活動」、③「個人の権利を保護すること」、④「国民の生活に対して其幸福の増進を図るの活動」の四点を指摘する⁽⁵²⁾。『人生地理学』発刊から二か月後の1903年12月、小野塚喜平次は『政治学大綱 下巻』を世に出すが、そのなかで、「強制組織」である国家が個人にとって必要とされる理由を以下のように述べている。

地球ノ表面カ已ニ殆ト全然国家間ニ分割セラレテ強制組織ノ下ニアル現今ニ於テハ移住スル個人カー個ノ領土ヲ離レ一政府ノ羈絆ヲ脱スルハ普通ニ他国ノ領土ニ入り他政府ノ羈絆ヲ蒙ルモノニシテ無国家的社会又ハ無社会的な地方ニ於テ毫無強制ヲ受クルコトナクシテ生活センコトハ殆ト不能ト言ツテ可ナリ故ニ個人ハ此境遇ニ適応シテ強制社会ノ一員トシテ自己ノ発達ヲ図ルノ外他ニ其途ナキナリ更ニ転シテ全然個人的眼光ヨリ観察スルモ個人ハ其資性ヲ発達シ其人格ヲ進化セシムルノ義務ヲ自己ニ対シテ有スル者ナリ孤立ノ個人ハ其完全ナル発達ヲ遂ケ難ク唯社会ノ一分子トシテ始メテ個人ノ充分ナル発展ヲ期シ得ヘシ而シテ社会ノ発達ニハ強制組織ヲ必要トシ⁽⁵³⁾

ここには、『人生地理学』における国家観との類似点が見られるが、小野塚も、W・W・ウィロビーやT・D・ウルジーといった「国家理性の神格化」を唱えたアメリカの政治学者の著書を参考にしていた⁽⁵⁴⁾。小野塚は、それらの国家論の影響を素直に受けて、国家の究極的な目的を人間理性の完全な展開、すなわち「人格の進化」としたが、牧口は、その観念論的要素をストレートには受け容れず、「幸福の増進」と解釈し直した。後年、『創価教育学体系』第4巻（1934年）のなかで「幸福生活を創造せんとするとする被教育者の力を指導し、啓培するのが教師の本務である」⁽⁵⁵⁾と述べているように、教育者および宗教家として、牧口が一貫して追求したのは自他共の「幸福」ということであった。そして、その「幸福」とは、次のように、「利」「善」「美」の価値創造であった。

教育の目的とする幸福の内容は要するに価値の創造獲得以外に出でない。而してその所謂価値は人間の如何なるものでも等しく希望する所の目的で、そのまた内容利、善、美なる方面の生活以外に出るものでない⁽⁵⁶⁾と断じ、それは従来自明の理として伝統されてゐる真、善、美の系列とは異別のもので、真又は真理は直ちに価値を有するものでなく、真理と価値とは全く別質のもので、真理と価値とが相対し利、善、美は価値概念の中に包括されて人生の目的たるものであれば、その三方面の創造を指導すると共に害、悪、醜なる三方面の反価値の生活を防禦することを指導することが、教育の要旨である⁽⁵⁶⁾。

河合栄治郎は、師・小野塚喜平次の影響もあってか、国家の命令強制権を「国家の構成員の人格成長の為にある」⁽⁵⁷⁾と主張したが、その「人格」とは「真、善、美を調和し統一した主体」⁽⁵⁸⁾

⁽⁵²⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、337-338頁。

⁽⁵³⁾ 小野塚喜平次『政治学大綱 下巻』博文館、24-25頁。

⁽⁵⁴⁾ 田口富久治『日本政治学史の源流—小野塚喜平次の政治学』未來社、1985年、30頁。

⁽⁵⁵⁾ 牧口常三郎『創価教育学体系』第4巻、『牧口常三郎全集』第6巻、1983年、248頁。

⁽⁵⁶⁾ 牧口常三郎「創価教育学体系梗概」1935年、『牧口常三郎全集』第8巻、1984年、394頁。

であった。河合の理想主義・人格主義思想は、昭和の戦前・戦中期において旧制大学・高校生を中心とした青年インテリ層に大きな影響を与えたが、アジア・太平洋戦争期に、「肉体に執着して死を避けようとするものは、肉体を最高価値とするもので、人格を最高価値とするものではないから、若し理想主義の立場に立つならば、死を厭うことは許されない」⁽⁵⁹⁾、「ハワイ海戦やマレー沖海戦を始めとして、大東亜の戦争を戦う我らの勇士は、至る処に祖国の為に自己を犠牲としつつある。そこにあるべき自我のある自我への勝利があり、利己的自我の克服がある」⁽⁶⁰⁾と、戦死や自己犠牲を正当化する言説を生み出すことになった。しかし、「幸福の増進」を目的とした牧口は、戦時下においても、「利害損得を無視した善悪は空虚であり、言ふべくして行はれない。実際の生活にできない種類又は程度の善悪は空虚の概念でしかあり得ない」、「所謂『滅私奉公』は一生に一度しか行ひ得ない理想である。この非常道徳を銃後の生活に強行しようとするは無理である」⁽⁶¹⁾と自己犠牲を激しく否定することができたのである。

牧口は、新渡戸稲造や柳田国男らとともに郷土会に加わって郷土に関する研究をすすめるとともに、コア・カリキュラムとしての郷土科を提唱したことも知られるが、『人生地理学』においては、国家と個人との間の生活空間としての「郷土」を重視する。

吾人は三千三百方里の世界に於て棲息するに先づて、二万七千方里の自国に於て棲息するものなるを覺ると等しく、二万七千方里の自国に於て衣食するの前に、数方里乃至数十方里の郷里に於て衣食しつゝあることを覺らざるべからず。斯くの如くなして、初めて吾人は数百乃至数千の一郷民たるが上に、五千万の一国民たり、而して尚ほ十五億万の一世界民たることを自覺するを得べし。即ち吾人は郷土を産褥として産れ且つ育ち、日本帝國を我家として住し世界万国を隣家として交はり、協同し競争し、和合し衝突し、以て此世を過しつゝあるものなることを自覺するを得べし。吾人は茲に至つて初めて自己の正當にして着実なる立脚地点の自覺に達するを得べく、從つて又、自己の正に務むべき職分を確定するを得べし。果して然らば此順序、此階段及其起発点としての郷土觀察が、公平に世界を遠觀する上に於て、將た正當に各自生活の立脚地点を自覺する上に於て欠くべからざるは最早別言を要せざるべし⁽⁶²⁾。

自己の立脚地としての郷土という観点は、後年、『教授の統合中心としての郷土科研究』（1912年）によって体系化されるにいたるが、教師生活のスタート地点ですでに意識していたようである。1892年6月中旬に、教育実習生として北海道尋常師範学校附属小学校の教壇に立った牧口が一番困惑したのは、「綴方」すなわち作文指導であった。師範学校時代にほとんど作文指導を受けたことのない牧口は、『『創価教育学』の源泉』と後年称した、三段階におよぶ独自の指導法

⁽⁵⁷⁾ 河合榮治郎「国家観に就いて」『河合榮治郎全集』第13巻、社会思想社、1968年、306頁。

⁽⁵⁸⁾ 河合榮治郎『学生に与う』1940年、『河合榮治郎全集』第14巻、53頁。

⁽⁵⁹⁾ 河合榮治郎「教養と祖国愛」1942年2月、『河合榮治郎全集』第19巻、1969年、254頁。

⁽⁶⁰⁾ 同上、258頁。

⁽⁶¹⁾ 牧口常三郎「価値判定の標準」1942年2月、『牧口常三郎全集』第10巻、1987年、34-35頁。

⁽⁶²⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、15-16頁。

を考案する⁽⁶³⁾。それは、まず、牧口が、学校から150メートルほどに位置する「新川」を題材に一文を作って生徒に示す、次に、300メートルほど離れた「創成川」を題材として、牧口と生徒たちが共同で作文する、最後に、生徒が自らの力で、約1キロメートルの距離がある「豊平川」を題材に文章を作る、というものであった⁽⁶⁴⁾。こうした身近なもののから遠くのものへと理解させる教授法は、師範学校で学んだベスタロッチ主義の教授法やヘルバルト主義の類化論の影響を受けたものであった⁽⁶⁵⁾ことは疑えないが、そもそも当時の文部省自体が、尋常小学校における地理・歴史教育において、そのような教授法を取り容れることを期待していた。1890年10月の小学校令改正を受けて出された「小学校教則大綱」(1891年11月)には、「尋常小学校ノ教科ニ日本地理ヲ加フルトキハ郷土ノ地形方位等児童ノ日常目撃セル事物ニ就キテ端緒ヲ開キ漸ク進ミテ本邦ノ地形、気候、著名ノ都会、人民ノ生業等ノ概略ヲ授ケ更ニ地球ノ形状、水陸ノ別其他重要ニシテ児童ノ理會シ易キ事項ヲ知ラシムヘシ」⁽⁶⁶⁾とある。しかし、実際の教育現場では、文部省の教則どおりというわけにはいかなかったらしい。牧口とならぶ郷土科教育の提唱者として知られる棚橋源太郎は、1903年1月発行の『尋常小学に於ける実科教授法』のなかで、全国の教員の多数が「毫も文部省の教則が要求せる所の学校の周囲、児童の住居せる郷土の自然及び人事等、日々児童の目撃し、接触せる事項を以て始むべきことに思ひ至らざりしが故に、児童は初めより、毫も真の郷土的地理郷土的歴史の教授によりて、準備せらるゝことな」い状態であると指摘している⁽⁶⁷⁾。こうした状態を憂える棚橋は、日露戦争勃発直前という時期において、郷土科の意義を以下のように説いたのである。

郷土科教授は、實際亦能く郷土に関して、有する児童の思想界を出発点とし以て、其の過去の觀念を矯正し、新たに又豊富なる直觀を与へて、実科諸分科に関する、基礎の觀念を養ひ、以て其の後來の教授を容易に類化するに必要な結合点を与へ同時に愛國心の基礎たるべき、愛郷土心を養成することを得べし、郷土科教授は、独り之れに止らず、児童をして其郷土の自然及び人事を觀察し、或は考察せしむるに當りて、また能く其の觀察を鋭敏にし、思考を精確にし、同時に智的及び、同情的諸方向の興味を喚起し、且其の觀察研究に依りて達せしめたる結果を修述することに依りて、談話の能を修練せしむることを得べし⁽⁶⁸⁾。

帝国主義最盛期において、多くの国民が抽象的な国家概念に振り回され、自己の立脚点を見失いがちになるなかで、棚橋と同様に、牧口も郷土を見つめることの重要性を強く意識したと考えられる。

⁽⁶³⁾ 牧口常三郎「四十五年前教生時代の追懷」1936年7月、『牧口常三郎全集』第7巻、1982年、411-412頁。

⁽⁶⁴⁾ 「新川」「創成川」「豊平川」の位置関係に関しては、伊藤貴雄「牧口常三郎の教授法」(『創価教育』第3号、2010年3月)を参照。

⁽⁶⁵⁾ 同上、190-195頁。

⁽⁶⁶⁾ 文部省編『学生八十年史』大蔵省印刷局、1954年、784頁。

⁽⁶⁷⁾ 棚橋源太郎『尋常小学に於ける実科教授法』金港堂、21頁。

⁽⁶⁸⁾ 同上、108-109頁。

6. 人道的競争

前述したように、1903年当時の国際情勢は帝国主義最盛期であり、牧口も「有限の世界に於て無限の繁殖をなす生物が、各々其生命を維持せんとするには直接か間接かに於て競争するは免れ難き所」⁽⁶⁹⁾と、生存競争をやむをえない事実と認める。しかし、その競争の形式が、人類の発展と共に「軍事的競争」「政治的競争」「経済的競争」「人道的競争」の四段階に変化していくことを指摘するのである⁽⁷⁰⁾。生存競争の最終形式が道徳・倫理にあるというのは、前述したように、建部遯吾や浮田和民がすでに説いていたところであり、牧口も彼らの主張から多少影響を受けていたと考えられる⁽⁷¹⁾。しかし、建部や浮田が、日本国家の独立という国家主義的な目的を実現するための最良の手段として道徳・倫理を位置づけたのに対して、牧口の「人道的競争」とは、以下のように、最終的には世界を競争社会から共生社会へと大きく転換させるという、すぐれて人道主義的なものであった。

人道的競争形式とは如何。従来武力或は権力を以て其領土を拡張し、成るべく多くの人類を其意力の下に服従せしめ、或は実力を以て其外形は異なるとも、実は武力若しくは権力を以てしたると同様の事をなしたるを、無形の勢力を以て自然に薫化するにあり。即ち威服の代はりに心服をなさしむるにあり。自己主義に其領土を拡張し、他国を征服せずとも風を臨み、徳に懷づき、自ら来る所の仁義の方法これなり。人道にかなふことは是れなり。是を以て現在の国際間に臨まんことは頗る突飛なるが如しと雖も、個人間の生存競争に於ては既に々に認められし所なれば、国際間に於ても亦た適用せられざるの理なし。(中略)要は其目的を利己主義にのみ置かずして、自己と共に他の生活を保護し、増進せしめんとするにあり。反言すれば他のためにし、他を益しつゝ自己も益する方法を選ぶにあり。共同生活を意識的に行ふにあり⁽⁷²⁾。

「自己を空にせよといふことは嘘である。自分もみんなも共に幸福にならうといふのが本当である」⁽⁷³⁾というように、自他共の幸福の増進こそ教育者および宗教家としての牧口がその生涯において追求したものであるが、その場合の「他」とは、日本国家の枠を超えたところにまで広がっていたのである。こうした人道主義的な考えは、『人生地理学』「第三十章 生存競争地論」の末尾に参考要書としてあげている、ポール・ラインシュ著、高田早苗訳『帝国主義論』（東京専門学校出版部、1901年）から大きな影響を受けていると考えられる⁽⁷⁴⁾。ラインシュは、ウィルソン政権時に中国公使を務めたこともある、著名なアメリカの政治学者である。前述したとおり国家観はバージェスやウィロビーの影響を受けており、その他、社会観に関しては、アメリカの心理学的社会学者であるF・H・ギディングズやA・フェアバンクスの著書を大いに参考にして

⁽⁶⁹⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、392頁。

⁽⁷⁰⁾ 同上、393頁。

⁽⁷¹⁾ 牧口と建部の競争観の比較に関しては、塩原将行「牧口常三郎の生涯から7.6を考える」（『創価教育研究』第3号、2004年3月）を参照。

⁽⁷²⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、399頁。

⁽⁷³⁾ 牧口常三郎「目的観の確立」1941年7月、『牧口常三郎全集』第10巻、8頁。

⁽⁷⁴⁾ 前掲塩原論文、159頁。

いた⁽⁷⁵⁾。

このように牧口がアメリカの社会科学研究の研究成果を多く取り入れていた理由の一つは、「将来の文明統合地は正に米国にありと言はざる能はず」⁽⁷⁶⁾というように、アメリカを文明の最先進国として見ていたからである。「米国に於て稍々其萌芽を含むと見るべき人道的方式」⁽⁷⁷⁾と述べているように、アメリカにおいては、すでに将来の「人道的競争」の予兆が見られると考えていた。こうしたアメリカ観は、「米國は實に二千年間の文明諸國の希望なりき」⁽⁷⁸⁾と説く、内村鑑三の『地理学考』（1894年）から影響を受けていたと考えられる⁽⁷⁹⁾。しかし、「欧の自由思想は英に於て最上の發育に達せり、而して新自由國の憲法は英の自由を以てすら尚ほ不満なりし清教徒の草案より成れり、北米合衆國の憲法は歐の粹の粹なりと言はざるを得ず」⁽⁸⁰⁾と、内村があくまで思想や政治の最先進国としてアメリカを位置付けていたのに対して、牧口は、経済・産業の最先進国としても捉えていたのである。牧口は、アメリカが原料品と原動力の二つの要素を備えている「最優の製造業發達地」であるとし、農業国から工業国に発展して、ヨーロッパの産業界に大恐慌を引き起こしたと指摘する⁽⁸¹⁾。そして、「一つの島国」といえるアメリカは、複雑な地勢のため多くの小国に分裂しているヨーロッパと比較すると、小国が免れることのできない内部の紛争がないため、傾注すべき軍備の費用を要しないので、資本を集中して経済活動に専念することができるという⁽⁸²⁾。

牧口は、アメリカの経済・産業の発展がその人道主義的な思想や政治を支えるものとして重視していたのである。生来、新潟柏崎荒浜の「一寒民」⁽⁸³⁾として困窮した生活を強いられてきた牧口にとって、衣食住は何よりも大切な問題であり、それが解決されてこそ文化・精神活動も成立するものと考えられたのである。

「倉廩満ちて榮辱を知り、衣食足りて礼節を知る」（管子）とは能く実業的活動と自余の社会的活動との関係を言ひ表はしたる語なり。人間が此世に生存するに当りては衣食住の根柢を離れて何等の活動をも為すこと能はず。吾人が知能的、道德的及び宗教的等の高尚なる精神活動をなし得るは、唯々欠亡の

⁽⁷⁵⁾ 「第二十三章 社会」の参考要書として、ギッチングス著、遠藤隆吉訳『社会学』（東京専門学校出版部、1900年）やフェアバンクス著、十時弥訳『社会学』（博文館、1900年）があげられている。

⁽⁷⁶⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、413頁。

⁽⁷⁷⁾ 同上、399頁。

⁽⁷⁸⁾ 内村鑑三『地理学考』、『内村鑑三全集』第2巻、岩波書店、1980年、439頁。

⁽⁷⁹⁾ 斎藤正二は、「若き牧口常三郎は、内村鑑三の『地人論』（『地理学考』）からは多大の（或る場合には、決定的とまで評したいほどの）学問的示唆を蒙っている」、「牧口の地理学的記述には、内村鑑三の『地人論』からの強い影響が見られるのである」と述べている。斎藤正二『『牧口常三郎全集』第1巻、補注』『牧口常三郎全集』第1巻、438頁。

⁽⁸⁰⁾ 『内村鑑三全集』第2巻、436頁。

⁽⁸¹⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、283-284頁。

⁽⁸²⁾ 同上、413-414頁。

⁽⁸³⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、12頁。

窘迫、飢餓、恐怖に対して保護せらるゝの安心ある時にあるのみ。是故に他の社会的活動の性質及び其発達^レの程度は此活動の進否によりて決定せらる。経済的活動は社会の真正なる基礎なりと謂ふを得べし。若しも社会、国家が此基礎の経済活動（或は機関）を等閑に附して政治、軍備、教育等の機関の拡張を図らんか、唯々破産あるのみ。近來我邦の社会が実力養成に其意を注ぐに至りたるは即ち此関係を自覚したるなり。実に社会国家に於ける一切の政策は悉く富国政策の基礎の上に置かれざるべからず。然れども独り実業機関のみの発達によりて社会は発達し得べからざるは論を俟ざる所なり⁽⁸⁴⁾。

将来やがて訪れるであろう「人道的競争」に参加するために、日本はまずアメリカのように経済・産業を發展させる必要がある。これまで、原料品を輸入しこれを精製して輸出するという商工業立国としての政策が国際競争に勝利するものと考えられてきたが、「原料の産出国にして且つ製造国」のアメリカやロシアといった後進工業国の台頭により、先発工業国である西欧諸国は大きな経済的打撃を受けている。そうした世界の大勢を踏まえ、国内の地勢をしっかりと認識し、商工業だけでなく「原始的産業」（農業）にも力を入れて、各種の産業を多方面にわたって展開すべきことを、今後の日本のとるべき政策として呈示する⁽⁸⁵⁾。そして、経済的に發展した日本が、これまでの帝国主義の覇者であるイギリス、新興国であるアメリカとともに、人道的競争を展開して、世界平和に貢献していくというのが、牧口が望む日本の将来像であった。

将来の世界の平和は恰かも大なる「小」字形に排列せらるゝ日米英の三国によりて維持せられ、依て人道的競争形式に基きて生ずべき文明は発達せらるべきものなるなからんか。兎も角も吾人は茲に至りて将来の文明に於ける日本の位置の多望なるを認めざる能はず。不知、四千万の大和民族は果してよく此天与の地位を利導し得べしや否や⁽⁸⁶⁾。

第一次世界大戦後、国際情勢が帝国主義から国際協調主義に変化しつつあるなかで、「大正デモクラシー」のオピニオンリーダーである吉野作造や石橋湛山は、日本の中国・朝鮮政策を批判したり、植民地放棄論を唱えたりするなど、道義国家としての日本に期待を寄せることになる。帝国主義最盛期の1903年という時点で、世界平和を視野に日本の人道的役割を期待した牧口の炯眼に改めて驚かされるのである。

おわりに

終戦の直前に特攻訓練中に命を落とした学徒兵・杉村裕は、沖縄でアメリカ軍と壮絶な戦いが繰り広げられていた5月12日の日記に、以下のような興味深い記述をしている。

アメリカ的なもの——漠然とこう呼ぶ——は、確かにプレゼントだ。快適である。生活の快適であるということは、人の心を容易に捉えて離さない。アメリカ的なものが日本的なものより——例えば、フ

⁽⁸⁴⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、216-217頁。

⁽⁸⁵⁾ 同上、334-336頁。

⁽⁸⁶⁾ 同上、414頁。

イリッピンの如きにおいて——歓迎されやすいということは、我々として大いに考えるべき問題を含んでいるだろうと思う。日本人が日本古来の伝統を振りかざしても、あまりにも狭量に、あまりにも排他的に、あまりにも独善的に他に対することを反省せぬ限り、東亜共栄圏の完全なる成立は望まれないのではないか？ アメリカには「精神」がない。このことは、アメリカでも真に心ある人ならば、気が付いているに相違ない。日本的な「精神」「こころ」、俺はこれを重視することに、けっして人後に落ちるものではないと、自ら信じている。ただ望むのは「人間」の全般的見方である。大きな目で人間というものを見たときに、衣食住というものが相当に大きなスペースを占めて問題となり、これを快適にすることが相当に大きい意味を有することを、改めて——判り切ったことが往々に軽視される——強調したいのだ。理想国家は——古めかしい言葉を引張り出したが——各人の生活をカムフラブルにすることを当然責任とするだろう。従来、為政者はおのれの愚鈍から、かかる理想に遠いのを糊塗するために、ことさらに精神主義を振り回したきらいがあるのではないか？ とにかく、偏見に捉われずに、アメリカ的なものの長所に目を向けることをせぬと、わが国も決して長くはないと、俺は思う⁽⁸⁷⁾。

東京帝国大学法学部で政治学を学んだ杉村は、国民総生産で約12倍差のあるアメリカを相手に戦争することの無謀さ、また、圧倒的な物量の差を糊塗するために、「万邦無比」の日本精神を振り回して、国民の戦意を煽る軍部政府の思惑をはっきりと見抜いていた。しかし、国民の多くは、「大東亜戦争」の道義に眩惑され、合理的精神を失い、破滅の道を突き進んでいったのである。

『人生地理学』に見られるような道義と功利をバランスよく調和させる思想が国民一般に浸透していれば、約300万人もの犠牲者を出したカストロフィーを防ぐことができたかもしれない。愚かなことに、軍部政府は、こうした見識の持ち主である牧口常三郎という人物を獄死という最悪な待遇で処したのである。

⁽⁸⁷⁾ 日本戦没学生記念会編『新版 きけわだつみのこえ』岩波文庫、1995年、350-351頁。